

こだわりの
現場主義
field story

世界銀行で経験を積み 複眼的な国際協力を目指す

(株)オリエンタルコンサルタンツグローバル プランニング事業部
(2017年3月時点)

川副 育大さん
Kawasoe Yasuhiro

過去20年の間に大幅に規模を縮小させた日本の政府開発援助(ODA)。それに伴い、日本の開発コンサルティング業界では、国際機関のプロジェクトの受注拡大に向けて、国際競争力を有する優秀な人材の育成が現実的な課題になりつつある。

こうした中、日本のとある若手コンサルタントがこの春、「国際機関の職員」として新たな船出を迎えた。オリエンタルコンサルタンツグローバル(以下、OC Global)に所属する川副育大さん(28)だ。

早稲田大学大学院で都市計画と防災について学んだ後、2014年にOC Globalに就職しコンサルタントとして経験を積んでいた川副さん。しかし、昨年初めごろに世界銀行の日本人若手職員の採用枠「ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー」(JPO)の防災分野の募集を見つけ、履歴書を送ったことが転機となった。

二度の英語面接では、15年のネパール大地震の直後から参加した同国での復興・防災支援の経験を踏まえて、「開発途上国における防災の難しさと、それを世界銀行の業務にどう生かせるのか」について自身の考えを面接官に存分にアピールできたことから昨年末に見事合格を勝ち取った。

さっそく4月から米国・ワシントンにある世銀本部の「社会保護・労働担当部署」で業務を開始している川副さん。「一見、防災と無関係の部署のようですが、実は、貧困層や社会的弱者と言われる人々ほど自然災害に対しても弱い弱だからこそ、世銀では貧困削減の取り組みに防災の視点を取り入れようとしています」と語る。



2015年のネパール地震から約1カ月後に被害調査に参加

他方、JPOのポストは2年間という期限付きの制度である。川副さんは「任期終了後、自分がどのような立場で国際協力に関わっていくのかはまだ分かりません」としながらも、「コンサルタントに復帰するとしても、世銀での経験は生かしていけると確信しています」と続ける。

そんな川副さんを突き動かしているのは、学生時代に経験したある出来事だ。日本で東日本大震災が発生した時に、ちょうどベトナムの古都フエを訪れていた川副さん。現地でテレビ報道や人々の反応を見て、世界が

日本をどんな視点で見ているのか考えるようになった。

この時の思いは、コンサルタントになった後も忘れなかった。例えば、日本の防災協力はとかく高い水準の対策を追求しがちと言われるが、相手国政府や、日本と共に協力する他ドナーの意向を無視し、非現実的な選択肢を取るとは避けなければならない。だからこそ、川副さんは「世銀での経験を通じて、日本の立場だけでなく、他ドナーや相手国政府、現地の住民といったさまざまな立場の考えを複眼的に把握できるようにになりたい」と意気込む。

「日本のコンサルティング業界全体にとっても、私の経験は役に立つはず。今や国際協力機構(JICA)のプロジェクトにとどまらず、幅広い仕事をこなせる人材のニーズが高まっていますからね」とクールな表情で話す川副さん。しかしそのまなざしには、待ちゆく未来への高まる期待感からか、力がみなぎっていた。

■profile■

かわそえやすひろ

1989年生まれ。早稲田大学大学院で修士号を得た後、2014年にオリエンタルコンサルタンツグローバルに入社。17年4月からは世界銀行のジュニア・プロフェッショナル・オフィサー(JPO)として新たなキャリアを歩み始めている

